三種兩所に於て發見せられしは、其の流行の盛なりし有様を語るものと見るに於て、誤る所なかるべし。

四　經典の形式に就きて

歐洲諸國に新疆出土の諸種の經典の齎らさるゝや學者は研究の結果、之を形式の上より區分して、其の經典が何れの宗教に屬するものなるかを知るべき、一の標準を定め得たり、即ちルコック氏は摩尼教の懺悔文なる Khuastuanift を解説するや『書は鮮明なるマニ文字にして、其の句讀の點 (punctuation) は摩尼教文書に就てのみ特に認めらるゝ符號、即ち一個或は二個の黑點の周圍に朱を以て圓形或は卵形を畫きたる、特種のものを以てせり』と (Journal of the R. A. S. 1911) 曰ひしが如く、⊙或は⊙の形を用ゐて、句讀を施こせしものは、みな摩尼教經典なりとは其の他の人々によりても一般に認められたる所なりとす、此のことはたゞ一箇經典の形式上の事實として興味あるのみならず、若し果して此の見解にして誤るなくんば、實に各地に蒐集せられたる無數の小斷片文書を分類する上に於て、甚だ便利にしてまた重要なる標準となすに足れり、何となれば、寸分の小斷片の如きは到底一々其の內容によりて、之が性質を區別し得べきに非ず、多くは不明として葬り去らるべきを以て、此の際かゝる形式よりする標準を得ば、內容の不明なるに係はらず、其の性質を區別し得べければなり、余も亦初めは此の見解を以て可能なりと思ひしも、然も此の如きは僅かの資料の上に立ちて、複雜なる形式の上に、急に一定の標準を立てんとしたる誤りなるを悟らざる可らざるに至れり、何となれば前記堀氏が得たる此の佛典の斷片には、摩尼教經典の證憑として疑はれざりし⊙⊙の符號が、每行讀點として用ゐらるゝのみならず、また彼に於て屢々認むる⊕の符號も